Textile no.25

東京農工大学科学博物館・友の会会誌　2024 年（令和 6 年）1 月

友の会
４０年を超えて

伝統工芸の技と精神は
先輩から後輩へ
引き継がれ
新たな息吹も
生まれています

28～32 回
サークル
作品展ポスター

◆伝えたい手わざの心
◆伝えたい
　手仕事のぬくもり
◆学びたい 守りたい
　先人の心
◆伝統の心をもとめて

ポスター担当者の
「ことば」から

作品展ポスターから
見える歴史
一つのサークル図から
全サークル網羅の図へ

33 回

36 回

39 回

40 回

友の会ご案内

友の会は会員の学習や研究などの便宜をはかると共に、東京農工大学科学博物館の活動を支援し、その発展に寄与することを目的として昭和 55 年(1980)に発足しました。
活動内容は以下のとおりです。

1.講習会や催し物などの開催
2.広報活動
3.サークル活動
4.博物館事業への協力
5.その他本会の目的に沿った活動

Textile25 号 内容

・館長、友の会会長挨拶
・ポスターと Textile から見えてくる･･･
・サークル作品展（2023 年度報告と 2024 年度）
・サークル活動紹介 / コロナ後の状況報告
・講習会 / 特別活動報告 / 支援活動
・友の会案内（現況、組織、入会方法等）
・科学博物館案内

新型コロナ禍を乗り越え、新たな飛躍に向けて

金子　敬一（科学博物館長）

新型コロナウイルスという未曽有の世界的な苦難を乗り越えて、科学博物館や友の会もようやく本来の姿を取り戻しつつあるかと思います。２０２０年１月に最初の国内感染者が報告されてから、２０２４年１月で丸４年となる計算です。この間、心苦しくも、活動の完全停止など大変な制約を友の会にお願いしました。しかしながら、そのような厳しい状況を経て、今日、ほぼ完全な形で活動されている姿を拝見すると、本当に頭の下がる思いです。また、２０２２年度は強い制約の残るなか活動していただきました。それにもかかわらず、２０２３年２月に、３年ぶりに再開したサークル作品展では、ブランクを感じさせない、すばらしい作品を数多く展示していただき、大成功との印象をうけました。また、３月４日には、友の会修了式に参加して、会員の方々お一人お一人に修了証書をお渡ししました。修了された方々の晴れがましいお顔を拝見することができました。さらに、４月１日には、友の会発足式にもお呼びいただき、新たに会員となられた方々ともお会いすることができました。２０２４年２月３日から１０日には、友の会のサークル作品展が予定されております。私も是非、作品展会場に何回か足を運んで、新会員の方々を含めた皆様と直接お会いして、お話を伺うのを楽しみにしています。実は、この原稿を書いているのは２０２３年の１１月末です。１１月の初めまでは、暖かい日が続いていたものの、その後急に寒くなり、短い秋となりました。しかしながら、１１月中旬なのに夏日を思い出させるような暖かい日もあり、これも異常気象の一つなのかもしれません。なお、気象庁の長期予報では、今後３カ月東日本は比較的暖かくなるとのことです。サークル作品展の期間中も好天に恵まれ盛会となるようお祈り申し上げます。

さて、２０２３年度は、友の会でも大きな変動がありました。ご承知の通り、９月末で國眼孝雄会長が勇退されたことです。國眼前会長は、リーダーシップを発揮されて、コロナ禍でも情報収集に努められるとともに、乏しい情報の中でも的確な判断を下されました。私も博物館長として色々と相談させていただき、ご助言をいただくなど、大変お世話になりました。１０月からは、佐藤令一新会長が着任されました。佐藤新会長は、カイコを含む昆虫の研究をされていた方です。農学研究院に所属されていましたが、小金井キャンパスにある生物システム応用科学府にいらっしゃったので、科学博物館についてもよくご存じかと思います。今後は、佐藤先生に諸事相談させていただきますので、その節はご指導のほど、宜しくお願い致します。最後になりましたが、國眼前会長、佐藤新会長、役員の皆さまに心から感謝申し上げます。

金子敬一（東京農工大学工学研究院　教授／科学博物館長）
（Keiichi Kaneko／知能情報システム工学専攻・知能情報システム工学科）

会長就任のご挨拶

佐藤　令一（科学博物館友の会会長）

国眼孝雄先生の後任として会長を拝命した佐藤令一です。令和４年３月に生協横に建物がある本学生物システム応用科学府を定年退職しました。専門は、モデル昆虫としてのカイコを使った「昆虫と微生物間、昆虫と植物間の相互作用の分子機構」で、昆虫病理学、昆虫免疫学、昆虫生理学といった分野です。具体的には、「BT 菌毒素のヒトには無害で昆虫だけを殺す仕組み」や「微生物の体内侵入に対する昆虫独特の細胞性免疫機構」、さらには「どうしてカイコはクワしか食べないのか・・に関する仕組み」などです。「絹の研究」のようにすぐに何かに利用できるようなテーマではありませんが、昆虫学上の非常に重要で応用に期待されるテーマを扱って、定年までに約１００人の大学院卒業生を輩出しました。ということで、専門は絹にはまったく無関係であり、そこから発展した様々な工芸に対してもまったくの素人です。しかし、芸術は大好きです。学生の頃や１０年ほど前には油絵を少したしなんでいました。今でもへたくそな２０号の絵が２枚残っています。しかし最近は、森林性サボテンというジャンルにはまっており、マンションのベランダは１００ほどの大鉢のサボテンで埋まっています。主に Selenicereus 属の紐状サボテン、「夜の女王」や「夜の王女」などを育てています。上手な人のもとではそれらは６月に、サボテンでは最大級の直径３０cm 近い花をつけますが、どうしたらベランダでそんな立派な花を咲かせられるかを日夜研究中です。機会がありましたら是非これら専門や趣味の話をさせてください（Instagram/@suzumesuzunariselene をご覧ください）。

役員会や代表者会議などへの参加を通して、皆様の友の会サークルが１０もあることを、驚きとともに最近ようやく知ったところです。また、「Textile」の写真や友の会サークル作品展のポスターなどで、それぞれのサークルがどれほど高い技術と魅力的な作品に挑戦しているかが分かり始めたところです。そこで、今年度の友の会サークル作品展を大変楽しみにしております。是非会場で、皆様が目指す技術的高みや惚れ込んだそのジャンルの魅力についてお聞かせください。以上述べてきた通り、工芸に関しては何の知識も持ち合わせない人間ですが、皆様の熱意と高いアクティビティーの活動を心から応援させていただきたく思っています。どうぞ宜しくお願い致します。

佐藤　令一（Ryoichi Sato／東京農工大学名誉教授）

ポスターとTextileから見えてくる友の会の歴史　～新しい時代に向けて

新しい時代に向かう前に来し方を振り返る作業として、Textileで検証を始めたところ、今号が25号で切りがよい。またポスターも作品展40回という数字に着目してみた。友の会の設立が昭和54(1979)、翌年1980年に友の会が立上がり43周年を迎えた。サークル設立の翌年に会員の1年間の成果をご覧いただくための作品展が実施されている。Textileの発行と作品展は、2011年耐震・機能改善工事のための休館、またコロナ禍による休館の時期は活動停止になりTextile号数、作品展回数が年度を通り過ぎ、今回たまたま25号、40回という数字が揃った。2007/11/28「友の会だより」によると作品展を実行委員会方式にし委員募集の記事を発見。サークル作品展は工学部附属繊維※博物館職員の手から作品展実行委員会へ、委員が役割分担し準備を進めることになった。※科学博物館へ名称変更前の時代

科学博物館の紆余曲折（大学の発展により学科再編も頻繁にあった時代。手狭になった教育・研究施設の拡大もあり、構内西地区にあった繊維博物館別館を工学部に返上、昭和15年築の建物の経年劣化に伴う再三の修繕工事、内装工事等、また国立大学法人化、組織変更により博物館も“繊維”から“科学”へ名称変更し全学の組織となった）に伴い、友の会とサークル活動も大学の動きに無関係ではいられなかった。館内の展示物移動、サークル活動場所の引っ越しもあった。その都度、当時のサークル会員が労力提供。先輩が博物館に収めた見事な作品も作者に返納せざるを得なかった。先輩への連絡をきっかけに、ちょうど30周年を迎えた友の会の行事の一環で設立当時のお話を伺う会を設け,その記録が2011年1月に「30周年特別記念誌」の発行になった。

ポスターを見ると32回までは担当サークル単一の作品図だが33回からは全サークルの作品を網羅していることが分かる。平等に足並み揃えての意識が強くなったようだ。

2011年3月に東日本大震災が発生したことをきっかけに、友の会による対外支援活動が始動し、現在の地域支援実行委員会へつながる。地域のイベントに参加して得た収益は、当初農工大が取り組む支援活動に提供する予定であったが、結果として福島県南相馬市に関わりのあった農工大教員・学生チームと合流した。この中で現金供与でなく友の会サークルの培った工芸の力で支援していく基本方針が生まれ＜**手仕事でささえあおう**＞のキャッチフレーズが誕生した。Textileの記事項目にも支援活動の枠が設けられ、近隣小中学校への授業支援等も含め、学びの社会還元を伝えている。コロナ禍にあっても手にした技が無念な心を支えた。

第39回のポスターは、ポスター制作担当者の意向で手仕事をイメージしたデザインになっている。

Textile　1月発行		作品展　2月実施		メモ
創刊号	科学博物館友の会だより TEXTILE	平8年/11月 (1996)	サークル作品展 17回	博物館職員編集
2 ～13号	同上タイトル	2003~09 (H10~21)	サークル作品展 18~28回	・友の会共同編集 ・2008繊維博物館から科学博物館へ
14号	同上タイトル	2010（H22）	伝統工芸会作品展 29回	14号以降↓友の会編集
15号	同上タイトル	2011（H23）	**伝統工芸会作品展 30回 30周年特別記念誌**	耐震工事 休館2011-12/9
16 ～18号	同上タイトル	2013～2015 (H25～27)	サークル作品展 31~33回	
19号	Textile 東京農工大学科学博物館・友の会会誌	2016（H28）	サークル作品展 34回	Textile誌名変更
20 ～23号	同上タイトル	2017～2020 (H29～R2)	サークル作品展 35~38回	**友の会40周年** コロナ2021・22年休館
24号	同上タイトル	2023（R5）	サークル作品展 39回	
25号	同上タイトル	2024（R6）	**サークル作品展 40回**	

友の会事務局　A.O.

サークル作品展

第 40 回サークル作品展のご案内

2024年 2 月 3 日（土）～10日（土）　　4日（日）臨時開館　5 日（月）休館日

今年の作品展は第 40 回という節目を迎えました。コロナ禍以降、初めてフルスケールで活動再開、楽しみはもちろんですが、学んだことを忘れたりしていないかとドキドキで毎回作業に取り組んでいます。

今年も去年同様、映像コーナーを設置、また好評だった体験コーナーも企画しています。

設備も少しだけリニューアルしました。スポットライトを、従来のハロゲンライトから LED のライトに順次取り替えていただくよう、博物館にお願いしています。

また、友の会ではSNSルールが策定されました。会場に掲示いたしますのでルールに沿ってご鑑賞ください。

作品展を楽しんでいただけますように。

（2024年度作品展実行委員会）

［博物館を
イメージしたポスター］

〈新会員募集受付〉

会期中に下記の申込ができます

○新年度サークル入会応募　○友の会継続手続き　○友の会新規入会

第 39 回サークル作品展のご報告

2023年 2月 4 日（土）～11日（土）　　5 日（日）臨時開館　6 日（月）休館日　来場者 2,441 名

3 年振りの開催となった今回はコロナ禍が収束していない中、感染症防止対策としてアルコール消毒液の設置・換気の徹底・人が密にならないように声かけ誘導など、異例ずくめの開催となりました。それでも大雪で開催が危ぶまれる日もありましたが、何とか無事 7 日間の展示を終えることができました。毎回好評の体験コーナーですが今回は 6 つのサークルが行い、予約で順番を待っていただくなど、大変好評で展示と共に楽しんでいただけたのではないでしょうか。

［窓の外は雪景色］

今回初めての試みとして、サークルの活動内容を知っていただくために、各サークルで活動を紹介する映像を作成し会場の一角でプロジェクター上映を行いました。来場者の方には作品がどのように出来上がるかを理解する助けとなり、会員にとってはあまり交流のない他のサークル活動を知る、良い機会になったと思います。

（2023年度作品展実行委員長：ボビンレースサークル）

サークル活動紹介

絹サークル

〔毎週　火曜日〕

１年	精練（繭）、真綿作り（角・袋）、糸作り（摺りだし・太真綿糸）、太真綿糸マフラー、作品作り
２年	精練（繭・緒糸）、真綿作り（角・袋）、糸作り（結城紬ぎつくし・スピンドル紡ぎ・電動紡ぎ）、染色（緒糸）、緒糸組マフラー、煮繭（手繰り）、共同作品作り
３年	煮繭、生糸作り（座繰り）、精練（生糸）、染色（絹糸）、撚糸実習、検尺実習、作品作り
４年	マネージャー、自己研鑽
・見学会や館外学習（養蚕や製糸に関係する施設での学習や実習） ・ボランティア（蚕を飼育している小学校で、繭から糸をひいたり、真綿を使った物作りの指導） ・講習会（草木染をした真綿を使った物作り）	

コロナ禍でも退会者が出ずに活動を再開することができました。

蚕が作る絹糸の美しさ、繭から作る真綿の温かさをご存知ですか。

絹サークルでは、繭から真綿を作るというとても貴重な体験ができます。

1、2年では、繭から真綿を作り、さらに真綿から紬ぎや手びきなどで糸を作ります。

3年では、繭から座繰りで生糸を作ります。

全学年で、真綿や糸を使って染色なども行い、作品作りをしています。

絹糸は着物や帯で良く知られていますが、真綿も結城紬、加賀指ぬき、金継ぎ、漆塗などの伝統工芸や真綿布団などに昔から使われてきました。

私達は、先輩から引き継いだ「糸を大切に扱う心」と実習を通して学んだことを継承しています。日本の絹の伝統を絶やすことのないように、日々楽しく学び、活動しています。

角真綿を作る１年生

手紡ぎサークル

〔月３回　第２・３・４木曜日〕

１年	**羊毛を紡ぐ**　羊毛の解毛・洗毛、スピンドルで紡ぐ、ハンドカーダー、藍の生場染め、草木染
２年	**綿を紡ぐ**　綿や藍の栽培、綿を紡ぐ、電動カーダー、紡毛機で紡ぐ、草木染、草木繊維の紡ぎ
３年	**絹を紡ぐ**　繭やキャリアの精錬・染色、羊毛と絹を混ぜてシルクウールを紡ぐ、絹を紡ぐ、草木繊維の紡ぎ
４年	後輩の指導・自主活動
※館外学習ワイルドシルクミュージアム（６月） ※藍染の見学・実習（１１月）	

サークルの主な活動

様々な自然素材で一本の糸にするまでの工程の大変さや楽しさを味わいながら活動しています。

６月〔羊の毛刈り〕

秩父高原牧場でコリデール種の羊の毛刈りを牧場の方の指導のもと行い、この原毛を教材として使用します。

羊と触れ合える貴重な体験でもあり、楽しい行事です。

10月〔講習会〕

手紡ぎサークルならではの講習会を一般の方向けに行います。

参加者一人一人がスピンドルで糸を紡ぎ、その糸で今年度はコサージュを作りました。

２月〔作品展〕

各学年で学んだ手紡ぎ糸を使い、１年間の集大成として作品を制作し展示します。

いろいろな工程を経て紡いだ糸には愛着があり、各自編む・織るなど思い思いの作品を作っています

ベニバナ染めの実習風景

手紡ぎ道具を持つ１年生

藍染サークル

〔毎週　金曜日〕

１年	２４種類の基礎絞り、染め	全員で藍を建て管理します
２年	１０種類の基礎絞り、染め	
３年	５種類の基礎絞り、染め	
４年	３年間学んだ技法を後輩に伝習し、各々の課題で卒業制作	
※藍建ては５月と９月の上旬に行います		

今年の藍染サークルは、年２回４つの甕（かめ）の藍を建てました。タデ藍の葉を乾燥し、発酵させた蓼（すくも）に木灰から抽出した灰汁を加える“発酵建て”です。１週間ほどすると液面に紫色の膜が張り、布を染められるようになります。良い色に染められるよう全員で藍の管理をします。

毎週金曜日の活動では、午前中に布（麻や綿）を染め、午後に基礎絞りを行います。主に１年は縫い絞り、２年は各種の絞り用針を使用する技法、３年はたたみ折り等を学びます。習った技法を生かし、伝統の技法に各自が描いたデザインを加え、オリジナルの作品を制作します。

毎年研修会を行い、専門家の技法や藍に対する考え方を学び、知識や見聞を広めます。

絞りを施した布の仕上がりは、染め上がるまで分かりません。思い通りに染まった時はもちろん、思いがけず良い表情が出ることもあり、絞りを解く瞬間はわくわくします。藍は生きているので、液の発酵状態により染め上がりが違うのも魅力です。

藍染サークルで共に学び、藍の魅力に触れ、自分だけの藍染めをご一緒に楽しんでみませんか！

基礎絞りを伝える

藍で染める

型絵染サークル

〔月２，３回　第１・３・５木曜日〕

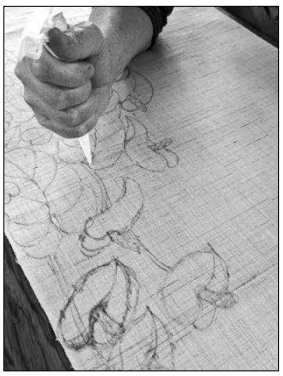
１年	型絵の基本を学ぶ（綿） つりについて学ぶ（麻）
２年	地染めを学ぶ（絹） 筒描きを学ぶ（麻）
３年	連続柄　おくりを学ぶ（絹） 自由課題（麻）
４年	後輩に技術をつたえる　サークルをまとめる 卒業制作
※琉球紅型染めを基本として、博物館に保存されている型紙や資料を参考に型染めを学びます ※第３木曜日は手紡ぎサークルとの調整あり	

型絵染サークルでは型彫り・紗張り・糊置き・色差しの工程を丁寧に時間をかけて進めて行きます。

琉球紅型の技法を基本として、９色の顔料を用いて色差しを行います。同じ図案でも色の作り方や組み合わせで、個性豊かな作品に出来上がります。最後に水で糊を落として模様がはっきり見えてくる瞬間は、毎回ハラハラどきどきします。

２年で「筒描き」を行いますが、これは型彫りはせずに、直接布に糊で模様を自由に描いていきます。大胆で大きな作品作りをすることが出来ます。

夏には、講習会を行っています。今年は、事前に糊置きをした「テーブルセンター」に参加者の皆さんに好みの色を差して頂きました。



筒描き

館外学習では、全学年合同で型絵染に関連した展覧会等を見学しています。

学年毎の作業が多いですが、全学年協力しながら楽しく活動しています。

個性豊かな型絵染に、是非一緒に挑戦してみませんか？

色差し

織物サークル

〔毎週　火曜日〕

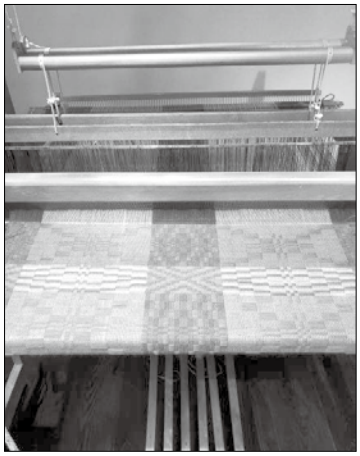
１年	つづれ織（フレーム織、竪機の共同作品） 平織、綾織、カード織、簡単綜絖
２年	色糸効果、レース織、浮織、変化綾織
３年	昼夜織、自由作品
４年	マネージャーとして活動

農工大科学博物館所蔵の貴重な織機を使わせて頂き、手織りについて多くの事を学んでいます。博物館の手織り機は、大正時代の高機をはじめ、ろくろ機、天秤機、卓上機、竪機と多岐に渡り、カリキュラムに応じてメンバーが交代で使用し、作品を織りあげていきます。

また、学年毎のカリキュラムと並行して、館外活動として４月に清瀬市の「はたおり伝承の会」にて見学と裂き織り体験をしました。他の博物館を訪れたり、外部の織りに関するイベントに参加したりと知識・興味を深めています。

このように恵まれた環境の下、学び探究していく先にある織りの奥深さと面白さに触れてみませんか？

竪機にて
共同制作



制作風景
オーバーショット

ボビンレースサークル

〔月２回 第１・３水曜日〕＊９月までは月３回

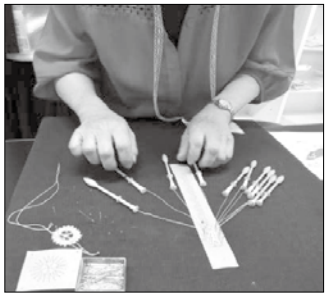
１年	トーションレース（平織り、綾織り、重ね綾織り、トライアングル、ファン、ダイヤモンド、ローズグラウンド、スパイダー、リーフ、タリー、四つ組、ピコ、ストレートエッジ、ギンプ）
２年	ブルージュフラワーレース（ブレイド、ピボット、葉、花、スクロール）
３年	バックスポイントレース
４年	マネージャーとして活動・ホニトンレース
※時間と根気と繊細さを要するボビンレース。学年の前半で基礎を学び、後半では自由制作をします。	

本年度よりレースサークルからボビンレースサークルにサークル名を変更しました。

ボビンレースは中世ヨーロッパの王侯貴族の衣裳を飾ってきた繊細で美しいレースに代表されます。当時は職人に作らせた装飾品でしたが、今日では作る人の織る楽しみ、使う楽しみとなり、生活を彩る伝統手工芸としてその技法が引き継がれています。

４年間で伝統的な４種類のレース技法を学びます。基本的なトーションに始まり、花と渦巻きのブルージュ、繊細なバックスポイント、緻密なホニトンへと進んでいきます。先輩方の丁寧な指導で上達が後押しされ、まさに織る楽しみを実感できるサークルです。長年引き継がれた貴重な本や資料も多く、担当学年がしっかり管理し、貸出しもしています。入手の難しい古い資料のレースは素晴らしく、全学年で覗き込みながら楽しい勉強会になることも度々です。

熱心で且つほのぼのとした雰囲気です。多くの方と織る楽しみを共有し、ボビンレースの魅力にふれ学んでみませんか。



活動風景

講習会

組ひもサークル

〔月２回　第２・４水曜日〕

１年	基本組　玉数を増やした組み方 丸四つ組（４玉）丸八つ組 平八つ組 角八つ組 金剛組(8 玉) 老松組 丸源氏組(16 玉) 自由研究・・梅八つ組
２年	基本組　応用の組み方 金剛組 内記組 奈良組 十六千鳥組(16 玉) 笹波組 御岳組 冠組(24 玉)
３年	応用の組み方 吉原つなぎ 唐組(24 玉) 貝ノ口(34 玉) 大台亀甲 内記小紋(32 玉) 自由研究・・安田組
４年	マネージャー　学年指導・自由研究

友の会の創立から 40 年以上引き継がれているサークルの 1 つが組ひもサークルです。

私達の活動は主に丸台を使用し、まず基本である丸四つ組（4 玉）から始まり、8 玉、16 玉に、2 年目にはサークルで代々受け継がれている十六千鳥組踏襲しつつ、3 年目の 34 玉の作品に至るまでを学んでいます。着物の帯締めを基本として作りますが、これまでの講習会等では日常に使えるネックレスやメガネヒモなどに応用出来ることも伝えてきました。組ひもの面白さは同じ組み方でも色の組み合わせや配置によって組む人の個性が表現できるところです。

色選びから自身のイメージを膨らませ、学びあう仲間と刺激しあいながら過ごすことはとても豊かな作業となります。組み上がって行く作品の絹糸の手触りと玉の触れあう音も心が和みます。場所も取らずご家庭でも出来るのも魅力のひとつだと感じています。

伝統の技術と組み方を学びつつ仲間と一緒に組ひもサークルで活動しましょう。

1年生16玉 老松組

峯工房にて
根付け研修会

ひも結びサークル

〔月２回　第２・４火曜日〕

１年	基礎となる３８種類の結びと応用作品 亀結びの色紙・お守り袋・立ち雛・干支 おひな様の色紙
２年	六瓢箪・伊勢海老結び・修多羅結び 根付け(亀・小海老・金魚)・香袋・お守り袋 小銭入れ・干支
３年	繭入り香袋・アイルランドのケルト模様 仕覆結び・中国結び・ブローチ(ぶどう・水芭蕉)・干支・訶梨勒・百合の花
４年	マネージャーとしての活動

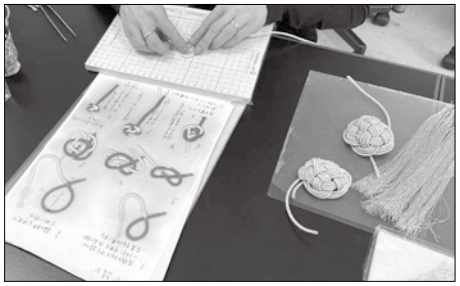
「結び」は私達の生活の様々な場面に登場します。実用から生まれた「結びの文化」いつしか装飾性を増し、美しい飾り結びになっていきました。

「ひも結び」サークルでは、最初の 1 年間で基本の結び方を学び、2 年、3 年と学年が上がるにつれ、様々な素材のひもで、色々な課題に取り組み、「結び」の技を身につけ、レベルアップしていきます。

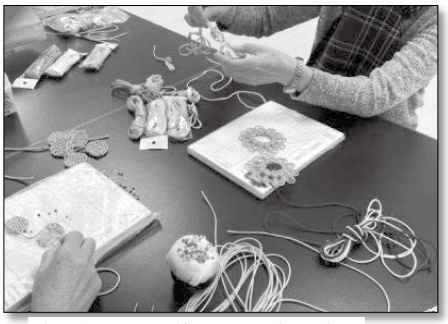
どんな複雑で大変に見える課題も、基本結びをマスターしていれば、必ず誰でも結ぶことができるようになります。

作品のためにひもを選ぶワクワク感、完成した作品を飾る喜びはひとしおです。

一本のひもから生まれる伝統の美と創造の技を、一緒に学び、一緒に体感しましょう。



作製図を見ながら結んでいる



様々なひもを使っての作品作り

紬瑠（つる）かごサークル

〔月２回　第１・３水曜日〕

年間を通して全学年での取り組み	・構内でシュロの採集 ・構内で樹皮，苧麻等の採集 ・河口湖へ樹皮の採集旅行 ・構内で苧麻の栽培 ・農学部 FM センター唐沢山へつる採集旅行
制作(シュロのかご、丸かご、乱れ編みのかご、樹皮を使った組かご、メロンかご、舟形のかご、縄ないの練習、コイリング、ブルキナ編みのかご、スカリ編み等)	

古くからの生活雑貨の素材の中の竹、藁、籐(輸入)を除いた植物で、加工を加えずに造るのがこのサークルの目的です。

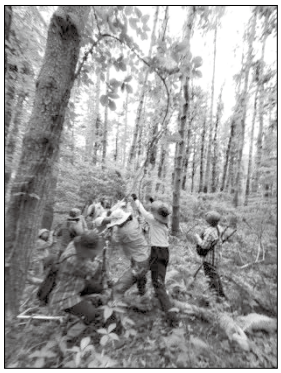
４月に構内の棕櫚（シュロ）、６月は河口湖国有林で樹皮、10 月には農工大演習林唐沢山にて蔓の採取を行います。又、構内には苧麻（チョマ）畑、身近な野山には野ぶどう、葛、藤や野草があります。

作品制作の年間カリキュラムは全学年共通で、１年時に基本技術をマネージャーから学び、２年生以上は相互に教え学びながら技術を受け継ぎます。
毎回作品を皆で講評して苦労話やアイデア等を共有します

自然の材料のそれぞれの特色を生かした作品の制作は大きな楽しみです。

いくつかに基本的な組み方、編み方を覚えたら、そこからオリジナリティのある作品が生まれます。

会の名前の「紬瑠」というのは「瑠」は宝石のように美しい篭を「紬ぎ」だすという命名です。



わら工芸サークル

〔月２回　第２・４金曜日〕

「綯う」「編む」「結ぶ」を基本に、技法の習得と伝承	
１年	縄ない、徳利結び、鍋敷き、履き物（わら草履、わらじなど）、砥石袋、宝船、亀、など
２年	べんけい、円座、深ぐつ、みの、など
３年	えじっこ、米俵、ばんどり、げんぺい草履、など
※農工大の農学部府中農場で先生の指導のもとに、６月には田植えを体験し、９月には稲刈りと脱穀を実施し、わら工芸の学習で使うわらを入手しています。	

わら工芸サークルでは、稲わらを使って伝統的な日用品を作ります。お米の副産物であるわらを、生活のあらゆる面に応用するわら工芸は、資源を有効に活用する持続可能な社会の象徴とも言えます。手間と時間はかかるけれど、既製品と違い自分の目的に合わせて大きさや形を自在に変える事ができ、使い終われば大地に還るわら。環境が重視される現代社会の流れにも沿っています。

サークルで作る鍋敷き、円座、えじっこ（バッグ）など今の生活にも役立つ道具は作り手によって個性が出るオンリーワンな作品に。使っていると友人たちから由来を聞かれ、わらにまつわる話題が広がる事も。正月飾りなどの縁起物も作ります。

また、今はほとんど使われなくなった草履、砥石袋、簑、ばんどり(背負子)なども作ります。石油由来製品に代用されたり、生活慣習自体が変わって消えた道具たちですが、わらを編み込んでいく地道な作業を繰り返す中で、 次第に立ち上がってくる形は先人たちの知恵の結晶。どうしてこんな手順を考えついたのか、なぜそのデザインなのか、わら製用具に込められた思いをなぞることは、私たちの生活を見つめ直すきっかけにもなります。

田植えや稲刈りの体験も交え、囲炉裏の周りでおしゃべりをしながらわらを編むような雰囲気の中で、わら工芸サークルの活動は行われています。一緒に座を囲む仲間をお待ちしています。

稲刈り

編み込み作業

コロナ後のサークル活動状況

【手紡ぎサークル】 全員揃って新年度がスタートしました。 今年度はコロナ禍では全くできなかった羊毛等の染色の学習をカリキュラム通りに進めることができました。手紡ぎサークル全員で協力し、知識を出し合いながらの作業にサークルの一体感と喜びを感じる活動再開となりました。	【わら工芸サークル】 コロナ禍を経、指導できる 4 年生が今年度は二人なので、OB の協力を仰いで活動を始めました。先輩方の参加は新鮮で新たな交流もでき、過去の活動情報なども得られます。前期に新 1 年生の突然の退会、補欠募集などのハプニングもありましたが、結果的にいいチームになりました。
【織物サークル】 私達は博物館の展示品の手織り機を使ってさまざまな織を学んでいく活動をしています。コロナ禍の間に退会され、指導役の 4 年生の人数が少ない為、OG の方々に大幅にサポートいただきながら、コロナ前の通常のカリキュラム通りの活動ができています。	【紬瑠かごサークル】 コロナの影響は上級生の減少に現れ、2023 年度は定員を超えた 1 年生を迎えました。時には OBG と合同で活動を行い、コロナ前とほぼ同じ内容で取組めました。材料取りのバスツアーを 2 回行い、夏休み冬休みの宿題を学年ごとにカラープリントでまとめました。地域支援のバザーにも参加し 2 月の作品展に向けて　各自励んでいます。
【絹サークル】 2023 年の活動から漸く通常の活動に戻りました。対面で真綿や糸づくりを学べることがいかに貴重なことかを実感しました。館外にも出かける活動を再開し、都内で唯一の養蚕農家である八王子長田養蚕を見学。また研修旅行では世界遺産の富岡製糸場、日本に今や二ヶ所しかない製糸工場である碓氷製糸を見学し、日本の近代化の中で生糸産業が果たした役割と現在の状況を目の当たりにしました。講習会では真綿の良さを体験して頂き嬉しいことでした。	【藍染サークル】 昨年の先輩達がコロナ禍での活動を模索してくださったので、今年はほぼコロナ前の活動に戻る事ができました。講習会も開催でき、活動を紹介できました。ラインを活用し、連絡だけでなく藍に関する情報交換や情報共有が行えたと思います。今年は前期・後期とも藍の色が濃く出て、多くの作品を染める事ができました。
【型絵染サークル】 4 月より、昼食をはさんでの午前午後の活動に戻りました。共同で道具を使い、広い場所を必要とする工程もあるため、焦らずに充実した制作がまたできるようになり、嬉しい限りです。コロナ禍により各学年から退会者が出て、仲間の作品からも多くを学びたい中でとても残念ですが、4 年生とＯＧの先輩方の指導のもと、制作に励んでいます。	【ひも結びサークル】 活動休止中、サークルメンバーは様々な工夫をし、各自自習で作品作りを進めてきました。コロナが収束することで、人との交流が出来るようになり、サークル活動が始まりました。レベルアップの為に OBG を招いてのサークル内講習。４年ぶりに「小金井なかよし市民まつり」への参加。11 月には講習会も開催。様々な活動に対する企画、準備を通して、より一層活発なサークル活動につながっています。
【組ひもサークル】 コロナ禍を終え通常の生活が始まるかのように思われましたが、いざ新一年生の準備のため道具の確認で大変なことに気づきました。特別な道具を使う組ひもは、多くの会社が廃業する中、当然需要の少ない伝統工芸については更に厳しい状況で、コロナの影響が道具にも及んでいました。一年生の道具は六月頃までかかり、材料の絹糸に関しても、染職人さんの頑張りのおかげで、活動も現在予定通り続けられています。	【ボビンレースサークル】 サークル名もボビンレースに変更し許可されました。マスク着用は続いていますが、緊張感と協力により前期の基礎課題を終え、10 月の講習会は、4 年生を中心に準備し、もっとボビンレースを楽しんでもらおうと一部用具をお持ち帰りとし自宅でも試みてもらうことに。支援活動でも、2 年生を中心に全員で作品作成。会員がコロナ期の間に減少したので、サークル一丸となってサークルの魅力を広報する意識で取り組み、全員それぞれに充実感を味わいました。

2023 年度コロナ後の大きな出来事は、サークル講習会の復活でした

対面を伴うイベントの自粛で中止していた講習会を待たれていた会員も多く、復活後初の組ひも講習会の応募状況からその熱気が伝わってきました。

次の 12 ページで参加者の声をお伝えします。

２０２３年度　サークル講習会

～年に一度、市民の方を対象に講習会を実施しています～

サークル名	日 程	内　容	参加
絹	9月12日	真綿で作る帽子とネックウォーマー	15名
手紡ぎ	10月19日	糸を紡いでコサージュを作りましょう	16名
藍染	7月7日	本藍で染めるストール	12名
型絵染	7月20日	テーブルセンター色差し体験	10名
織物	10月24日	ミニマフラーを織る	12名
ボビンレース	10月4日	ボビンレースで飾るピンクッション	20名
組ひも	6月28日	組ひもで作る「トンボ玉のネックレス」	12名
ひも結び	11月28日	ひも結びと水引きでつくるお正月飾り	17名
紬瑠(つる)かご	11月15日	森の自然を編む　太づるをあしらったみだれ編みのかご	17名
わら工芸	12月8日	正月飾りを作ろう	21名

３年振りに復活したサークル講習会

友の会だよりや、ホームページ、Ｘ（旧Twitter）で募集のお知らせと同時に申込が届き、トップバッターの組ひもサークルの講習会は、定員を大幅に上回る2.5倍の応募がありました。

例年通り、往復はがきとメールでの申込には「再開を楽しみにしていました」と、沢山の方から嬉しい添書きがありました。

講習会後のアンケートには「丁寧な指導をありがとうございました」「楽しくできました」「また参加したいです」との感想を頂きました。

講習会はサークル活動の魅力を伝えると共に、サークル生にとっては、技術を継承（指導）する実施研修の大切な場です。講習会の復活は友の会の（サークル）活動にとって大きな意義のある年になりました。　（友の会事務局）

特別活動 報告　わらと絹

各サークルは館内で行う定例活動のほか、時には館外へ素材の採取旅行、見学・研修に出かける。今回は特別活動の中から、気になる活動をピックアップしてみた。「絹」と「わら」どちらも繊維であるが、昆虫の蚕からの繊維と植物の稲わら、素材の異なる繊維である。

5 月 12 日(金)わら工芸サークル
読売新聞社から取材訪問があり対応した

2023 年 9 月から夕刊に掲載予定の企画「藁を探して」などの取材で、わら細工に携わる方々の話を伺いたいとの訪問であった。
当日の取材風景の写真は Twitter にも掲載したが、その後、取材結果の記事はどうなったか、ネットで検索してみたところ・・・
読売新聞オンラインで
「藁を探して」シリーズの記事を発見
日本各地のわら文化を訪ね、豊富な写真図とともに、丁寧な取材を重ね充実した内容を報告している。※2023/9/12　以降夕刊掲載

<1>循環型生活の象徴、稲藁　土から生まれ土に還る 9/12
<2>過酷な労働支えた道具 9/26
<3>巨大人形　集落の守り神 10/10
<4>各地に伝わる「藁の文化」の魅力訴え…10/24
<5>体が覚えていた故郷の技　11/14
シリーズ記事は 12 月まで継続予定

機会を設けて、ぜひ読売新聞オンラインでシリーズに目を通していただきたい。日本の衣食住に深く関わってきた藁、実用と文化、暮らしの美を藁に見出す、その奥深さに驚嘆する。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

わら細工ではなく“わら工芸”の名称である友の会「わら工芸サークル」では、農工大の農場のご協力によりコンバインで刈り取りしてない稲を手刈りして藁を確保している。

地域支援活動で赴いた南相馬の神社で大しめ縄づくりを指導、しめ縄に使えるわらの稲作まで指導してきた。また現在も各地の氏子さんからしめ縄指導の依頼が舞い込んでいる。

わら工芸サークルの活動はわら文化の継承そのもの

10 月 21 日～11 月 5 日
絹サークル　4 年生制作（制作当時は 2 年生）
群馬県立世界遺産センター
「真綿のウエディングドレスの展示」

コロナ騒動が始まる 2019 年度(2020 年 2 月実施)のサークル作品展で展示された、当時の絹サークル２年生の共同制作の作品。
作品展後、富岡製糸場の展示が決まっていたがコロナにより中止になった経緯がある。今年になり同じ富岡市内にある、世界遺産センターで展示が実現できた。当時の 2 年生はコロナ禍の 2 年半の活動休会を経て、今春４年生になり、展示までに本当に長い時間がかかった。

2 年生はカリキュラムでまだ座繰り(繭から直接糸をとる方法)を学習する前の、真綿づくりを習得した段階で制作している。
【約１２００粒の繭を使用して】

・ベールは真綿を極限まで薄く伸ばして作った繊細な美しさ
・リボン状にした真綿から作ったネックレスの工夫、真綿を薄く伸ばして作ったスカートの艶やかさ
・トップスは真綿を細い糸にし、かぎ針で編んだ
・ブーケ、ヘッドドレスの花は繭を薄く剥がして作った

展示は、富岡市の世界遺産センターの 11 月 5 日の会期後、12 月上旬まで埼玉県本庄市児玉町の昭和館で展示された。昭和館は保育園や小学校の子供たちに養蚕や座繰りを体験させている施設。

支援・広報活動

１．科学博物館行事への協力　２．社会貢献活動　が主な活動の柱となっています。

手仕事でささえあおう　のロゴは東日本大震災の復興支援活動で生まれたものです。友の会の大きな部分を占めているサークル活動から得た工芸技術を、己のみでなく社会に還元していく精神が、科学博物館の社会貢献活動に大きな力を与えています。この他、科学博物館周囲の環境整備作業も継続して取組んでいます。

西東京わら相撲人形講習会－　9 月 29 日(金)

幼稚園児と わら細工で相撲人形を作る

西東京市保谷「作左衛門の森を愛する会※」の幼稚園を、わら工芸修了生８名が指導訪問、参加者 25 名

※作左衛門の森（屋敷林）を守る活動をしている会

「わらは環境にやさしいのよ」と話し始めて　“お米を食べると力がついて元気になるのでたくさん食べましょう”“お米が出来た後に、残るわらを使って作品をつくり、終われば肥料として土に戻る、環境にやさしい”ことを伝えた。

子どもたちは作左衛門の森を遊び場として、何でも自分でやるような環境にあり、理解力が早く、一つを習得した後は自分で二つ目を作りだし指導者側の手がかからず見事な出来であった。

「森を愛する会」からも数人の大人が参加し、独創的な人形と、カタツムリを作り、わらへの興味を深めていた。

小金井なかよし市民まつり ---- 支援バザー ----

10 月 14(土)・15(日)　小金井公園で開催

初日は快晴、翌日の午前中は朝からの雨にも関わらず多くの来場者を迎え、午後の雨上がり後も絶えない人出であった。コロナ禍では休止していた市民まつりが再開され、友の会も久しぶりに参加。友の会地域支援委員会メンバーは以前のノウハウが分からない中、シンプルな運営を目指し、ひとつのテントに土・日で５サークル日替わり形式を採用。テント内の混雑の解消にはなったが、一日のみの販売では天候等で中止せざるを得ない時の対処が難しい等の課題が残った。　　～バザーの収益は支援活動の経費に使われます～

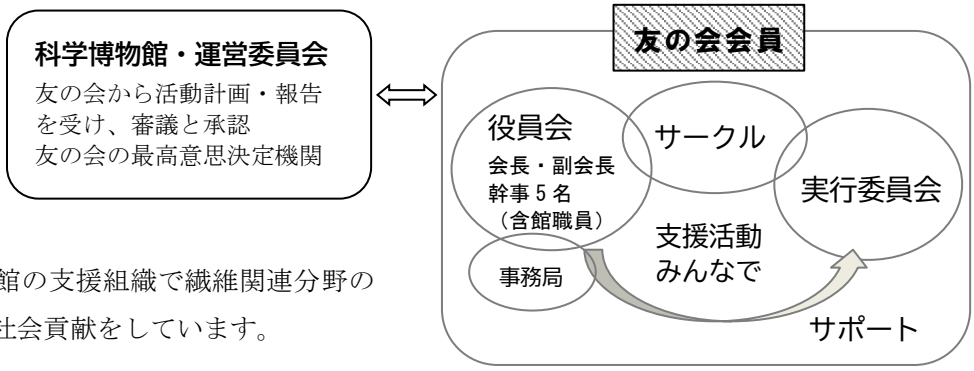
テント内の
お買い物風景

バザー出品トピック　　*ガチャポンのルールはどこに？*

修了生の集まり＜維（つなぐ）＞からは、ガチャポンカプセルに入れた小さな作品を一律価格で提供した。将来的にミュージアムグッズに採用されるか試行。 ガチャなので“手に取ったらお買い上げ”がルールだが、作品リストを用意したために逆に指定されてしまった。結果は 6 割の売上、でかしたと言えるのか、微妙な結果だがガチャポンに不慣れな層にも大いに楽しんでいただけた。

友の会組織

2023 年 12 月 1 日現在
会員数 276 名



友の会は科学博物館の支援組織で繊維関連分野の学習と研究を通して社会貢献をしています。

友の会サークル活動

現在、下表のように 10 サークルがあります。講師による教室ではなく、会員相互の自主的な活動です。先輩が後輩の指導にあたり、文化と技術を伝えていく、教えられ、教え合う、ユニークなシステムです。

1 学年 4 人 4 年制、16 名体制
最終学年の 4 年生が下級生を指導し、会の運営を担うマネージャー役を務めます。

2023 年度サークル所属会員数　　合計 135 名

（2023 年 12 月 1 日現在）

サークル名	人数	サークル名	人数
絹	15	※ボビンレース	11
手紡ぎ	14	組ひも	15
藍染	15	ひも結び	15
型絵染	12	紬瑠(つる)かご	12
織物	12	わら工芸	14

※2023 年改称

委員会活動

各サークルからの選出メンバーで構成される以下の委員会があり、サークル活動の運営、行事等の企画実行を行っています。

○代表者委員会…円滑なサークル運営のため、友の会役員会と各サークル代表が協議する組織

○地域支援実行委員会…社会貢献に取組むためバザーを企画実行し支援活動資金に充てる

○作品展実行委員会…サークル活動 1 年間の学習成果発表の場であるサークル作品展を企画実行

サークル入会を希望する方へ

サークル活動の”規約”をよく読んで、ご応募ください。規約は友の会 HP にも掲載してあります。

○募　集

・年に一度、サークル作品展開催時に募集します。
・所定の申込書に記入し、サークル作品展期間中に会場の　友の会受付担当者に提出してください。
・募集する会員は毎年各サークル4名ずつです。システムを理解していただくための面談を経て、応募者が多い場合は抽選になります。

※詳細は別紙「2024 年度募集要項」をご覧ください。

友の会へのおさそい

友の会には誰でもいつでも入れます！
（高校生以上の方なら入会できます）

＊年会費　2,000 円
（友の会は会費・寄付により運営されています）

会員になると
・友の会活動の案内「友の会だより」
・サークル講習会のお知らせ
・その他博物館行事のお知らせ
をお届けします。

友の会への連絡・お問い合わせは、
kahakutomo@gmail.com
tomojimu2@gmail.com
ホームページ
https://web.tuat.ac.jp/~museum/support/tomo

科学博物館　ご案内

―― 科学博物館 ――

開館日　火曜～土曜　10:00～17:00
（ただし入館は 16:00 まで）

休館日　日曜・月曜・祝日
5 月 31 日（大学創立記念日）
夏期　8 月 15日～16 日
冬期　12 月 28 日～1 月 3 日
ほかに臨時休館することがあります

交　通　・JR 中央線東小金井駅
南口　徒歩 10 分
nonowa口(Suica 利用)徒歩 7 分
・JR 中央線武蔵小金井駅 南口
CoCo バス(中町循環)を利用して
「農工大前」下車

入館料 無料

沿革・概要

JR 中央線東小金井駅から徒歩 10 分、武蔵野の面影を残した緑の中に当館があります。当館は 1886 年(明治 19 年)に農商務省蚕病試験場参考品陳列場として創設された古い博物館です。2008 年(平成 20 年)工学部附属繊維博物館から、名称を科学博物館に改め、全学組織となりました。

大学の附属博物館という性質上、学術的価値のある資料が多く集められており、その時代において学生の教育上あるいは産業界の指導的役割をはたした資料多数を収蔵しています。養蚕を中心とした繊維関連の資料を展示すると共に、現在大学で進められている最先端の研究活動などについて紹介しています。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

⇒博物館 HP に「科学博物館ニュース速報」を掲載し、企画展、展示替え等を 随時お知らせしていますのでご利用ください。

https://www.tuat-museum.org

編集後記

作品展実行委員Textile担当になり各サークルの活動に触れることが出来ました。

コロナ禍によりメンバーの減少や技術の継承がうまく出来なかった時期もあったかと思われますが、皆様の努力や思い尽力で活動が戻ってきました。活気あるサークル活動が完全に戻り技術が受け継がれ多くの方々に手仕事の素晴らしさを知っていただく場所として40年超えたばかりですが50年100年と続く友の会サークルになると確信しました。

（サークル活動紹介／2023年度活動状況／編集担当：ボビンレースサークル）

※全体編集は友の会事務局が担当しています

繊維技術研究会（通称 技研）

科学博物館支援団体の繊維技術研究会は1999年に発足以来、繊維に関わる技術の伝承、研究を通じて科学博物館活動を支援しているボランティア団体です。展示資料、主に繊維機械の動態展示および保守管理も行なっています。

●実際に機械を動かし、ご案内していますので気軽にお声掛けください。（原則、毎週火曜日）

●科学博物館ホームページ内のFacebookに「繊維のひとコマ」を作り、技術の裏や興味深いトピックを紹介しています。

【会員募集中】

繊維技術研究会では、ご自身の知見やキャリアを活かした活動にご関心のある会員を募集中です。繊維と機械などの専門知識をお持ちで無くても構いません。毎月第3火曜日に例会を開催し概ね毎火曜日には繊維機械の動態展示・解説活動も行っています。

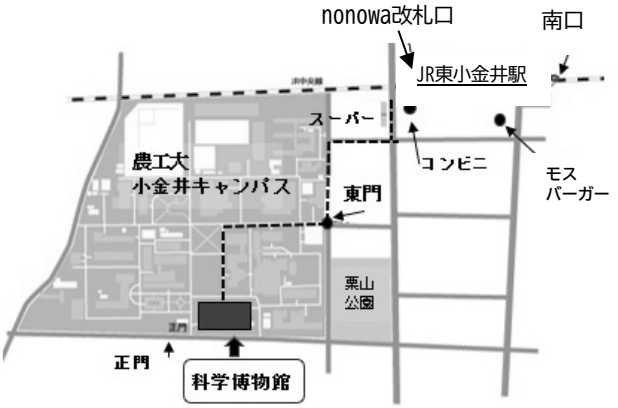
関心のある方は第３火曜日に科学博物館内繊維技術研究会をお訪ねください。

musset(みゅぜっと)

musset（みゅぜっと）は、2013 年(平成 25 年)に発足した博物館支援学生団体です。科学博物館の活動を支援することによって、東京農工大学の学生に相応しい見識と能力を併せ持つ人格を形成し、社会人としての総合能力を発揮できる素養を身につけることを目的としています。

●来館者への展示解説、展示準備や資料整理の補助

●小学生対象の科学実験イベント「サイエンスマルシェ」を企画実施し、近隣の子どもたちが科学と親しむ重要な機会となっています。



Textile（東京農工大学科学博物館友の会会誌）25 号
2024年　1月発行

東京農工大学科学博物館・友の会
〒184-8588　東京都小金井市中町 2-24-16
TEL　042-388-7687
FAX　042-388-7598
https://web.tuat.ac.jp/~museum/support/tomo/